神奈川県立総合教育センター研究集録29:47～52.2010

「現在求められている教育」を関連させた学習指導に関する研究

金　子　憲　勝[1]

教育課題の多様化に伴い、学校現場には情報教育、環境教育、キャリア教育等の様々な教育の実践が求められている。そこで、「現在求められている教育」を関連させた単元の指導計画を開発し、授業実践を行った。その結果、教科指導の充実を図ることができ、「現在求められている教育」を関連させた学習指導の有効性が検証できた。研究成果は、冊子『「現在求められている教育」を関連させた学習指導』にまとめた。

はじめに

急速な社会の変化に伴い、児童・生徒を取り巻く生活環境は大きく変化し、教育課題も多様化している。今日の教育現場には、この諸課題を解決するための教育が求められている。

中央教育審議会による「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について（答申）」（以下、「中教審答申」という。）が、平成 20 年１月に公表され、「社会の変化への対応の観点から教科等を横断して改善すべき事項」として、「情報教育、環境教育、ものづくり、キャリア教育、食育、安全教育、心身の成長発達についての正しい理解」が、具体的に記されている。

神奈川県教育委員会では、「明日のかながわを担う人づくり」を推進するために、教育の総合的な指針となる「かながわ教育ビジョン」を平成 19 年８月に策定した。その「かながわ教育ビジョン」には、今日の教育課題を解決していくために、特に集中的・横断的に進めていく必要のある「重点的な取組み」として、「情報教育」や「環境教育」、「キャリア教育」等の充実が述べられており、まさに様々な教育の実践が求められているといえる。

研究の目的

これまでに神奈川県立総合教育センターでは、情報教育、環境教育、キャリア教育、読解力向上に関する教育、シチズンシップ教育等、「現在求められている教育」に関する研究を数多く行い、それぞれのテーマについて、基本的な考え方や指導上の指針、児童・生徒に育成したい能力（力）、具体的な指導例等を示してきた。そして、その研究成果は多くの学校で活用されてきた。

その一方で、「現在求められている教育」が数多くあり、学校現場はその対応に苦慮しているという状況も見受けられる。

そこで、児童・生徒の現状から判断した「児童・生徒に付けたいと考えている力」（以下、「付けたい力」という。）に基づき、「現在求められている教育」を関連させ、通常行われている教科等の指導の中で実践できる単元の指導計画を開発することにより、教科指導の充実を図ることを目的に研究を行った。

研究の内容

１　研究の方向性

学校における課題を解決する方向として、「現在求められている教育」を関連させ、各教科等で実践できないかと考えた。

２　研究の具体化

上の研究の方向性に沿って行うべきことを次のように具体化した。

(1)「現在求められている教育」を関連させるために

「現在求められている教育」のうち、以下の教育を取り上げ、それぞれの教育の目的や理念、児童・生徒に育成したい能力（力）等を整理した。

・情報教育　・環境教育　・キャリア教育
・シチズンシップ教育　・読解力向上に関する教育

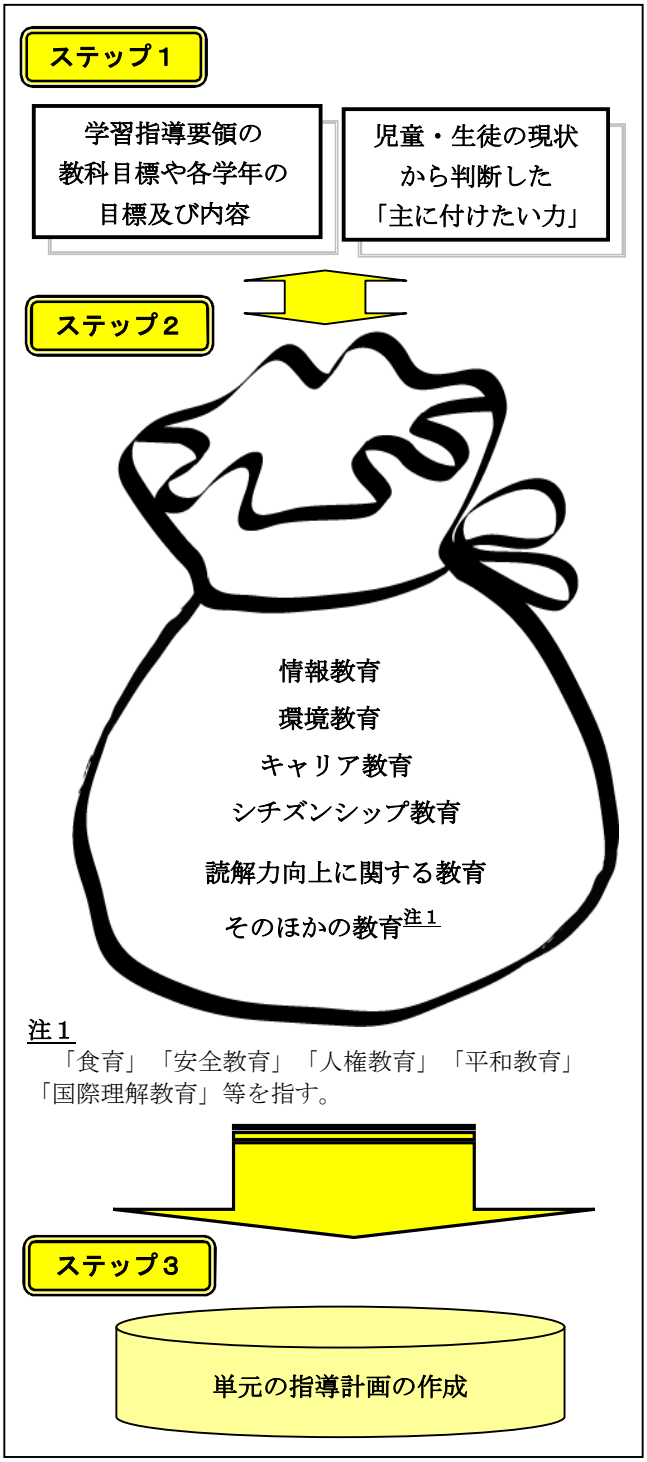
なお、取り上げた教育はあくまで例示であり、「現在求められている教育」はこのほかに幾つもある。例えば、「中教審答申」に示されている食育や安全教育であり、そのほかにも人権教育や平和教育、国際理解教育等が挙げられる。

それぞれの教育の目的や理念、児童・生徒に育成したい能力（力）等を整理することにより、各学校が児童・生徒の現状から判断した「付けたい力」と関連させることができると考えた。

(2)各教科等で実践するために

「現在求められている教育」を関連させるための指導計画を立てる方法を開発し、それを第１図の「指導計画作成モデル」とした。

1　カリキュラム支援課　指導主事



第１図　指導計画作成モデル

ステップ１として、学習指導要領の教科目標や各学年の目標及び内容を確認するとともに、児童・生徒の現状から判断した「主に付けたい力」を検討する。

この場合の「主に付けたい力」とは、教師が児童・生徒の現状から判断した「付けたい力」の中で、単元の目標や内容と関連させることができる、特に育成したい力のことである。

次に、ステップ２として、ステップ１を踏まえて、情報教育、環境教育、キャリア教育等のどの教育と関連させることができるかを検討する。

このときに、「主に付けたい力」と「現在求められている教育」のどれを関連させるかについては、繰り返し検討することが必要である。また、関連させる教育を検討する際には、「主に付けたい力」を再度見直すことが必要になる場合もある。

ステップ３として、以上の流れを踏まえて、単元の指導計画を作成する。なお、最終的な単元の指導計画にするためには、教材の選定、指導方法や指導形態の工夫等の検討が重要となる。

３　実践例の紹介

第１図に示した「指導計画作成モデル」の手順に沿って単元の指導計画を作成し、小学校及び中学校で授業実践を行った。本稿では、そのうちの二つの事例を紹介する。

(1) 授業実践Ｉ

ア　単元の指導計画の作成

小学校第５学年の理科の事例である。単元は「私たちの気象台」を扱った。

(ｱ) ステップ１

本学級には、自分の考えを書くことはできるが、書いたことを相手に伝えることは苦手な児童がいる。自分が書いた内容に自信が持てないために、発言に対して消極的になっている。授業者は、書いた内容に自信を持たせるために、本やインターネットで調べさせるだけではなく、家族や地域の人たちから直接取材をさせることが重要だと考えた。そして、そこで得た情報を基に考えさせ、発表させる活動を取り入れることにした。

授業者は、取材の課題を「働くことと天気とのかかわりを知ろう」とした。理由は、教科書にコンビニエンスストアの店員が天気予報を基に仕入れの商品の種類や量を変えていることが載っており、天気予報を生活にいかしている例として児童に分かりやすく、学習への興味・関心を高めることができると判断したからである。

授業者は、このような基本構想に基づいて、本単元で「主に付けたい力」を、情報を活用する力（A）、思考する力・判断する力（B）、表現する力（C）、職業を理解する力（D）とした。

(ｲ) ステップ２

これらの力を育成するに当たって、次の教育を関連させた。その上で、具体的な指導計画や個々の学習活動のねらいなどを明確にすることにした。

○読解力向上に関する教育

天気を予想するために、天気に関する情報を解釈し、熟考・評価させる。この学習活動を通して思考する力・判断する力（B）の育成を目指す。

○情報教育

天気に関する情報を得るために、情報機器を活用させる。この学習活動を通して情報を活用する力（A）

の育成を目指す。

○キャリア教育

家族や地域で働く人から取材して得た情報を整理して発表させる。この学習活動を通して、天気を予想することの大切さに気付かせるとともに、表現する力（C）と職業を理解する力（D）の育成を目指す。

(ｳ) ステップ３

以上の流れを踏まえて、単元の指導計画を作成した。第１表には、本単元の学習の流れを示した。

第１表　「私たちの気象台」の学習の流れ

①「天気と暮らしのかかわりを知ろう」（1時間）	・天気が生活と密着し、天気の予想が生活に役立つことを知る。 ※ ⑤において、生活だけでなく働くことにも結び付ける。
②「晴れや曇り、雨の日など、天気によってどんな違いがあるのだろうか」（1時間）	・それぞれの天気でどのような変化があるかを考える（B）。
③「1日の気温の変化や雲の動きなどから、天気について分かったことを発表しよう」（4時間）	・天気の観察記録や雲の動きに基づき、何が分かるかを考える（B）。 ・パソコンや本を活用して天気に関する情報を集める（A）。 ・分かったことを班で発表する（C）。
④「明日の天気を予想してみよう」（2時間）	・集めた情報を活用して明日の天気を予想する（A、B）。
⑤「働くことと天気とのかかわりを知ろう」（2時間）	・働くことと天気とのかかわりについて取材したことを班で報告する。（C） ・各班で天気とかかわりがあることが分かった職業をまとめる。（D） ・分かったことをクラス全体に発表する。（C、D）

イ　学習の実際

約２週間、児童は、学校にいる間は１時間ごとに気温を計測して「お天気日誌」に天気の観察記録を記入し、そこから１時間後の気温を予想するという活動を行った。最初は自分の席で１時間後の気温を予想していたが、それでは予想しづらいことが分かり、外を見たりベランダに出たりして予想するようになった。活動を始めて数日すると、「今日は雨だから、この前の雨の日と一緒かもしれない」と考え、過去のデータを参考にする児童も出てきた。

「晴れ・曇り・雨」の天気では、何が違うかについて児童に考えさせた。出た意見は、「雲・気温・風・空の色・生き物の生態・体調や気分」の六つにまとめることができた。その後、この六つのテーマの中から一つを選ばせて、天気との関係を調べさせた。児童は、「お天気日誌」、インターネット、本などを活用して、自分の目的とするものを積極的に調べてまとめていた。その際、ほかの人に分かりやすく伝えるためにまとめ方や見せ方を工夫していた。

単元の最後には、「働くことと天気とのかかわりを知ろう」という課題を与えたことにより、児童は様々な職業の人に取材をすることができた。取材をした相手の職業は、次のとおりである。

・新聞配達員	・生花店の店員
・デパートの店員	・和菓子店の店員
・コンビニエンスストアの店員	
・病院の看護師	・学校の先生
・交番勤務の警察官	

取材で得た情報を基に発表原稿を作成させてから、発表活動を行った。和菓子店へ取材に行った班は、天気によって作る和菓子の数量を変えることや、雨天時には商品がぬれないようにビニール袋を用意することなどを知ることができた。一方、新聞販売店へ取材に行った班は、雨の降りそうな日は「ロールフェルト」という機械で新聞をビニールに入れてから配達することや、その機械を利用すると新聞一部を包むのに一秒しか掛からないことを知ることができた。このように取材したからこそ分かったことが多くあり、教科書や本だけでは分からない情報を収集することができた。また、発表の場面では、発表者がほかの児童からの質問を受け答えることを通して、働くことと天気とのかかわりについて理解を深めていった。

ウ　実践後の考察

読解力向上に関する教育を取り入れることで、「お天気日誌」のデータやインターネットで検索した情報等から必要な情報を取り出し、解釈させるという学習指導を行うことができた。その結果、児童は、晴れの日は気温の変化が大きく、雨の日は気温が上がりにくいことなどに気付くようになった。そして、過去のデータを活用しながら天気を予想することができるようになり、自分で得た様々な情報から１時間後の気温を予想するなど、思考する力・判断する力(B)を養うことにつながった。

情報教育を取り入れることで、「必要な情報の主体的な収集・判断・表現・処理・創造」を意識した学習指導につながった。児童は、１時間後の気温を予想するために外に出て雲の様子を観察したり、インターネットを活用したりして、目的に合った情報収集の方法を選べるようになった。また、このような活動を通して、児童は必要な情報と不必要な情報を判断できるようになり、調べるテーマに応じて情報を収集し、どの情報を活用するか比較・検討することができるようになった。

キャリア教育を取り入れることで、天気と働くことを関連させた学習指導につながった。児童は、様々な人に取材をし、その情報を基に発表原稿を作成し発表したが、自分たちで直接取材した内容は児童の心に残り、自信を持ってほかの児童に伝えることができた。また、互いに質問をすることができるようになり、その質問に堂々と答えるなど、児童の表現する力(C)は以

前より見違えるほど高まった。さらに、天気という題材を働くことと結び付けて様々な職業の人に取材することで、働いている人たちがお客さんを大切にする気持ちを知ることができた。第２表は、本単元の学習活動後に行ったアンケート調査の結果である。本単元の学習指導が、職業を理解する力(D)を育成することにもつながったことが分かる。

第２表　アンケート結果（クラス人数 31 人）

項　　目	人数	割合
職業について理解がとても深まった	12 人	39%
職業について理解が深まった	19 人	61%
職業について理解が深まらなかった	０人	０%

(2)　授業実践Ⅱ

ア　単元の指導計画の作成

中学校第３学年の社会科の事例である。単元は「福祉の充実」を扱った。

(ｱ) ステップ１

本単元では、生存権を保障する社会保障の仕組みや内容を理解するとともに、身近な施設や地方公共団体の活動などを調べる中で、福祉政策における課題などを学習する。

生徒は、授業にまじめに取り組むが、学習態度は受け身である。そのため、与えられた知識は覚えようとするが、資料から必要な情報を取り出し、その情報を基に自分自身の考えを構築し、表現する力が不十分な面がある。このことから、授業者は、資料を活用させて、自分自身の考えを発表させることが必要だと考えた。また、多くの生徒は、自分たちが暮らす地域の中にも様々な形で、人が暮らしやすいようにする工夫がなされていることに気付いていない。そこで、自分が町長になったと想定して社会資本を整備するという課題に取り組ませることで、生徒に思考・判断する場面を設けることが、暮らしやすい町づくりの工夫について気付かせる上で有効だと考えた。

授業者は、このような基本構想に基づいて、本単元で「主に付けたい力」を、情報を取り出す力（A）、思考する力・判断する力（B）、表現する力（C）とした。

(ｲ) ステップ２

これらの力を育成するに当たって、次の教育を関連させた。その上で、具体的な指導計画や個々の学習活動のねらいなどを明確にすることにした。

○読解力向上に関する教育

町の総合長期プラン、教科書、資料集等から必要な情報を取り出し、その情報を基に与えられた課題について考え、班ごとにまとめたものを発表させる。この学習活動を通して、情報を取り出す力(A)と表現する力(C)の育成を目指す。

○キャリア教育

町に住む人々や町で働く人々などの様々な立場から暮らしやすい町について考えさせる。この学習活動を通して、思考する力・判断する力(B)の育成を目指す。

○シチズンシップ教育

生徒自身が地域社会に参画するという意識を育てることができる課題を提示する。この学習活動を通して思考する力・判断する力(B)の育成を目指す。

(ｳ) ステップ３

以上の流れを踏まえて、単元の指導計画を作成した。第３表には、本単元の学習の流れを示した。

第３表　「福祉の充実」の学習の流れ

①「身近な福祉施設を調べよう」（1時間）	・資料や自分の経験から、福祉施設の工夫を見付ける。(A) ・地域に住んでいる人を念頭に、利用しやすい福祉施設について考える。(B)
②「社会保障制度の概要について知ろう」（1時間）	・保険証の使用、予防接種などの社会保障制度を利用した経験を発表する。(C) ・生存権を具現化するための社会保障制度の仕組みと内容を理解する。(A)
③「社会保障制度の課題について知ろう」（1時間）	・資料から、少子高齢化に伴う社会保障の課題を読み取る。(A) ・これからの社会保障の在り方について、自分の考えを発表する。(C)
④「社会資本の整備『暮らしやすい町』を提案しよう」（2時間）	・自分が町長になったと想定して、暮らしやすい町にするための課題を見付ける。(A) ・整備する必要がある町の社会資本について、住民の立場から必要度と財政のバランスを踏まえて順位を付け、その理由を考える。(B) ・根拠を示しながら自分の考えを伝えるとともに、相手の意見を聞き、自分の考えとすり合わせることができるように話し合う。(C)
⑤「『暮らしやすい町』の発表をしよう」（1時間）	・まとめた内容を班ごとに発表する。(C) ・ほかの班の発表を聞き、良い点や改善すべき点をアドバイスする。(C)

イ　学習の実際

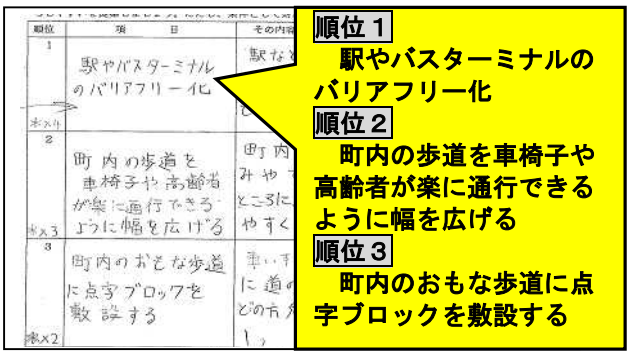
４時間目から６時間目までは、３時間目までに学習した内容を基にして、「自分が町長であったら、どのように暮らしやすい町づくりを行うか」という課題に対し、町の地図や町が作成している総合長期プラン等をテキストとしながら、課題に取り組ませた。

最初は、個人で考えさせ、その考えたことを班になって意見交換させた。自分たちが生活している町が題材だったため、生徒は意見も出しやすく、授業者が予想していた以上の生活に密着した意見が多く見られた。例えば、「駅型保育園を設置する」という意見では、「最近は女性の人も多く働いているので、駅の近くに保育園があれば、仕事帰りにすぐに子どもを迎えに行け、そうすると安心して生活することができ、住民も嬉しいと思うからです」という理由を書いていた。

また、「港を活用し、朝市広場などのイベントができる場を作る」という意見では、「自分たちの町で捕れる魚を新鮮に食べることができるし、多くの人と交流することができ、町の憩いの場にもなると思うから」

等の理由を書いていた。

発表内容を事前に班内で意見交換させたことにより、全員の前で自分の考えを進んで発表することができていた。



第２図　生徒のワークシート

ウ　実践後の考察

この単元において「主に付けたい力」として、情報を取り出す力(A)、思考する力・判断する力(B)、表現する力(C)の育成を目指し、読解力向上に関する教育、キャリア教育、シチズンシップ教育を取り入れた指導計画を作成した。

読解力向上に関する教育については、情報を取り出す力を育成するために、教科書や資料集、それに町が作成している総合長期プラン等をテキストとして与え、そのテキストの中から必要な情報を取り出させた。その後、そのテキストを基に「暮らしやすい町」について考え、考えたことを班内で意見交換し、班ごとにまとめたことを発表する場面を設けた。

その結果、一斉授業ではほとんど発言することがなかった生徒も、自分の考えを発言することができ、班の人たちと協力して課題を解決しようと意欲的に学習に取り組めていた。また、和やかな雰囲気の中で話し合いが行われ、互いの意見交換を行う中から表現する力(C)が育成されていった。

キャリア教育の視点としては、町に住む人々のことや町で働いている人々のことも考えさせながら課題に取り組ませたため、様々な立場の人のことを考慮した意見が出され、生徒の思考する力・判断する力(B)が育成される様子を見取ることができた。また、生徒の職業への理解を深めるために、町長の立場で考えた結果、生徒の多くは課題への興味・関心が高まり、積極的に課題に取り組めていた。町の財政を考慮して財政負担が少ない項目から選び、重点政策について考えた班もあり、町長の行政担当者としての責任を想定した発想もあった。

今回の課題は、自分の住んでいる地域の様々な立場の人を考慮し、より良い町づくりへと提案をすることであった。このような学習を続けることで、地域生活の向上への視点が養われ、より良い社会を目指そうとする意識が養われていると実感することができた。シチズンシップ教育の根本である地域に関心を持ち、自分の生活を見直すことができた生徒が多くいた。

生徒は今回の課題に対し、意欲的に取り組み、自分たちの考えを互いに出し合うことを通して、思考する力・判断する力(B)を養うことができただけではなく、以前より地域社会に参画しようという意識が育っている。

後日、町役場の担当者に、生徒が考えた「暮らしやすい町」の提案を伝えた。生徒は、自分たちの意見が町の政策にいかされるかもしれないという感想を持ち、社会的責任を実感することができた。

研究のまとめ

本研究では、小学校・中学校において六つの実践を行った。

実践事例を検証すると、「現在求められている教育」を関連させて取り組んだことにより、どの事例も児童・生徒の「学習意欲」が高まり、教科指導の充実を図ることができた。これは、本研究で開発した第１図の「指導計画作成モデル」に沿って単元の指導計画を作成したことにより、「知識・技能を教え込む授業」から、「知識・技能を活用する授業」に転換したからだと言える。

例えば、授業実践Ｉで紹介した単元「私たちの気象台」では、１時間目から６時間目までは、読解力向上に関する教育と情報教育を関連させて、「基礎的・基本的な知識・技能の習得」を目指した。その後の７・８時間目は、６時間目までに習得した知識・技能を活用して明日の天気を予想させ、９・10 時間目はキャリア教育の視点を取り入れた「働くことと天気のかかわりを知ろう」という学習内容にし、児童に「働くことと天気のかかわりについて、家族や地域の人たちから取材すること」という、課題を提示した。

その結果、発表までには全員が家族や地域の人たちから取材を行うことができ、働くことと天気のかかわりについて理解を深めただけではなく、指導計画を作成する前に考えたねらいどおり、情報を活用する力(A)、思考する力・判断する力(B)、表現する力(C)、職業を理解する力(D)の育成につながった。

第４表　実践事例の一覧表

	事例Ⅰ(小学校)	事例Ⅱ(中学校)	事例Ⅲ(小学校)	事例Ⅳ(小学校)	事例Ⅴ(小学校)	事例Ⅵ(中学校)
情報教育	○		○		○	
環境教育					○	
キャリア教育	○	○		○		○
シチズンシップ教育		○				
読解力向上に関する教育	○	○	○	○	○	○

六つの事例を通して、どの教科やどの単元においても読解力向上に関する教育の視点は取り入れやすく、

いずれの事例においても言語活動の充実につながることが明らかになった。さらに、読解力向上に関する教育は、情報教育、キャリア教育等と関連させやすいということも分かった。

本研究では、一つの単元を対象として指導計画を作成した。「現在求められている教育」を充実して実践するために、今後は一部の単元や一部の教科、一部の学年だけで行うのではなく、学校全体で年間を通したカリキュラムを作成することが必要になる。例えば、小学校であれば、６年間を見通したカリキュラムを作成し、その後中学校との連携を図ることが望まれる。

「現在求められている教育」の目的や理念、育成したい能力（力）や態度等を理解していなければ、その教育を推進することはできない。それぞれの教育を教職員が十分理解するために重要となるのが校内研究である。各学校で行われている校内研究の中で、計画的に「現在求められている教育」について正しく理解する機会を作り、教職員の共通理解を図ることが大切である。また、各教科等の連携を図りながら実践に取り組むことも大変重要である。

本研究では、小学校と中学校の調査研究協力員が意見交換する大変よい機会になった。現在、県内では、小学校と中学校の教職員が意見交換する機会を作っている学校があり、そのような機会を作ることにより、校内研究会の一層の充実が図られると考える。

おわりに

本研究を踏まえて、研究成果物冊子「『現在求められている教育』を関連させた学習指導」を作成した。小学校、中学校の実践例を紹介しているので参照していただきたい。また神奈川県立総合教育センターWebページでは、研究成果物をダウンロードできるだけではなく、本研究で扱った事例のすべての学習指導案を掲載している。併せて参考にしていただきたい。(http://www.edu-ctr.pref.kanagawa.jp/)

なお、本研究を進めるに当たりご指導・ご助言を賜った桐蔭横浜大学の谷田部玲生先生、ご協力いただいた６名の調査研究協力員の方々に深く感謝の言葉を申し添えたい。

［調査研究協力員］

大和市立草柳小学校	井上　和美
伊勢原市立伊勢原小学校	長谷川　絵里子
小田原市立千代小学校	久保寺　仁
逗子市立久木中学校	古屋　淳
二宮町立二宮西中学校	松本　雅志
厚木市立玉川中学校	佐々木　規雄

［助言者］

桐蔭横浜大学教授	谷田部　玲生

参考文献

神奈川県教育委員会 2007 「かながわ教育ビジョン」

神奈川県立総合教育センター 2005 「キャリア教育推進ハンドブック」

神奈川県立総合教育センター 2007 「神奈川版：『読解力』向上のためのガイドブック」

神奈川県立総合教育センター 2008 「情報教育推進ガイドブック」

神奈川県立総合教育センター 2009 「『ＥＳＤを踏まえた環境教育』推進ガイドブック～今までの学習指導を見直してみよう～」

神奈川県立総合教育センター 2009 「『シチズンシップ教育』推進のためのガイドブック」

神奈川県立総合教育センター 2009「平成20年度研究指定校共同研究事業（小学校・中学校）『学びが広がるキャリア教育』」

経済産業省 2006 「シティズンシップ教育と経済社会での人々の活躍についての研究会報告書」 http://www.meti.go.jp/press/20060330003/citizenship-houkokusho,honpen-set.pdf（URLは2010年１月取得）

国立教育政策研究所教育課程研究センター 2007 「環境教育指導資料[小学校編]」 http://www.nier.go.jp/kaihatsu/shidou/shiryo01/kankyo02.pdf（URLは2010年１月取得）

中央教育審議会 2008 「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について（答申）」 http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/news/20080117.pdf（URLは2010年１月取得）

文部科学省 2002 「情報教育の実践と学校の情報化～新『情報教育に関する手引』～」 http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/zyouhou/020706.htm（URLは2010年１月取得）

文部科学省 2006 「初等中等教育の情報教育に係る学習活動の具体的展開について」 http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/18/08/06082512/001.htm（URLは2010年１月取得）